



日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.81

日本ルイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF）2014年6月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL047-351-4464 FAX047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

超豪華に『国際ジャズデイ 大阪』(International JAZZ DAY OSAKA) 開催 外山夫妻がサッチモでデイ・プログラム開催ファンファーレ 東北とニューオリンズを結びつけた“ジャズのカ”を世界に発信

世界中のジャズファン注目の中、国連ユネスコ親善大使、ハービー・ハンコック氏らジャズ界のスーパースターを迎えた『国際ジャズデイ 大阪』(国連教育科学文化機関=UNESCO主催)が4月30日、大阪市内で超豪華に開催された。開催前、その全容が少しずつ明らかにされていく中、外山喜雄・恵子夫妻のこれまでの草の根的な活動が、この国際的なビッグ・イベントの中心的なテーマとして急速にクローズアップされてきた。世界中の超一流アーティストが結集する中でこの日、デイ・プログラムのオープニング・ファンファーレが外山夫妻に託されたことも、それを象徴的に物語っている。そのファンファーレ曲は『ウエストエンド・ブルース』。何ととっても、やはりジャズはサッチモ！ そして、東日本大震災の被災地・東北とハリケーンの被災地ニューオリンズを結ぶジャズの交流が真っ先に取り上げられ、その模様は当日、各メディアやインターネットを通じて世界中に発信された。大阪がジャズに燃えた1日をレポートする。 (小泉良夫)



写真は、『国際ジャズデイ 大阪』デイ・プログラムのオープニング・ファンファーレで『ウエストエンド・ブルース』を奏でる外山夫妻(大阪・西区の大阪スクールオブミュージックで)。この会報の記事中、大阪城 西の丸庭園・特設ステージで開催されたグローバル・コンサートの写真は、いずれも主催者側が世界中にインターネットで中継した映像(<http://live.jazzday.com/>)から切り抜きました

**ユネスコ親善大使のハービー・ハンコック氏も夫妻の活動を絶賛
「音楽はいつも文化の橋渡しとなってきた。ジャズの役割は大きい」
デイ・プログラム冒頭で新聞記事を掲げ日米ジャズ交流を紹介**

**ホテル・レストランや会場で出演者、メディアに
外山さん自らがWJF会報や記事コピーを配る**

30日午前9時半、出演者や大会関係者が宿泊中の、大阪城をのぞむホテルニューオータニ大阪(大阪市中中央区)の大広間で、ユネスコ親善大使のジャズ・ピアニスト、ハービー・ハンコック氏をはじめ、出演者が出席して記者会見が始まった。秋吉敏子、ルー・タバキン、ウェイン・ショーター、小曽根真といった各氏、スーパースター20人近くが顔をそろえる。



外山夫妻はこの後、すぐに始まる「デイタイム教育プログラム」(Daytime Educational Program) のファンファーレ担当などもあって、ホテルから車で15分ほどの大阪スクールオブミュージック専門学校(同市西区、湯川れい子名誉校長)へと急ぐ。

10時45分、同校エントランスホールで外山さんの奏でる『ウエストエンド・ブルース』が高らかに響き渡

る。恵子さんがバンジョーであわせる(写真上段中央)。盛大な拍手の中でデイタイム教育プログラムが始まった。各種のワークショップやディスカッションのなかで、マーカス・ミラー氏と対談したハンコック氏、「音楽はいつも文化の橋渡しとなってきました。その中でジャズの果たす役割は大きい」などと語っていたが、この対談のイの一番になんと！外山夫妻の長年の活動を大々的に報じたジャパントゥデイ紙の紙面(コピー)を聴衆に掲げて見せ、ニューオリンズと東北の2つの被災地を結びつけた“ジャズの絆”



から語り始めたのだった(写真下段)。

実はこのコピー、ホテルでの朝食時にレストランで、顔を合わせたアーティストや外国メディア関係者に外山さんが自ら、まさに挨拶代わりに手渡していたもの。外山さんは会場でも、IDカードを下げた関係者やメディアにこのコピーやWJFの会報配りに奔走していた。そんなこんなでばたばたしている合間に駆けつけた産経新聞大阪本社の社会部記者が外山夫妻を取材。終わってすぐに午後1時半過ぎから、この日の本番パネルディスカッション、題して『東北大震災とハリケーン・カトリナ討論会』。昼食などとしている時間がまったくない。

**ハリケーンで被災したグラミー賞受賞アーティスト
& 夫妻、佐々木、松本各氏が「音楽の力」熱弁**

主催者側のウィル・ラムゼイさんの司会で席に着いたの



は、ニューオリンズ出身でグラミー賞受賞ギタリスト、クリス・トーマス・キング氏と外山夫妻、

仙台から駆けつけた“みやぎ音楽支援ネットワーク”佐々木孝夫さん(粋なジャズカフェ・バー「ジャズ・ミー・ブルース noLa」オーナー)、そして東京から国際交流基金の松本健志さん(文化事業部米州チーム長)の5人(写真上)。

ラムゼイさんがまず東北を襲った大震災とハリケーンにより壊滅的な被害を受けたニューオリンズの被害状況を話したあと、キング氏がマイクをとった。彼はニューオリンズで被災し、今は州都のバトンルージュ在住、大震災の直後に気仙沼の「スウィング・ドルフィンズ」などに楽器を贈ってくれたニューオリンズのテイピティナス財団とも関わって音楽の指導に当たっている方。被災地に癒しの

力を与えてくれた音楽、その体験談を語る。

ここでステージ右の大画面に松本さんが持ってこられた映像が映し出された。それは一昨年(2012年)秋、ニュー

オリンズからやってきた高校生とヤングバンドが、気仙沼など東北の被災地を回って子供たちのバンドと交流した感動的なシーン。さらに、これらを経験した女の子たちが、「あなたにとって音楽とは？」との問いかけに次々に答える。「はい、それは人と人との心をつなぐものです」「気持ちをハッピーにしてくれるもの」「世界を結びつける絆」「生活の一部」…と。

外山さんは、50年ほど前、ルイ・アームストロングに憧れて、恵子さんと2人でニューオリンズに渡り、同地で送った5年間のジャズ修行から語り始めた。「ジャズはアメリカが世界にプレゼントしてくれた最高の贈り物…」と。しかし、実際に夫妻が体験した“ジャズとルイ・アームストロングの故郷”ニューオリンズは銃と麻薬に悩まされていた。「小学校の入り口に“銃の持ち込み禁止”という表示が出ているのです。小学校ですよ」語りかける。

「そんなわけで私たちは“銃に代えて楽器を!”のスローガンのもとワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション(日本ルイ・アームストロング協会)を20年前に立ち上げました。以来すでに800点もの楽器をニューオリンズの子供たちにプレゼントしてきました。そんな折の2005年、ハリケーン・カトリナがニューオリンズを襲ったのです。私たちが楽器を贈っていた高校も壊滅してしまいました。それで私たちは日本のジャズファンや会員のみなさんの呼びかけたところ、1300万円もの義援金が集まったのです。それをニューオリンズに届けました」

「そして2011年の東日本大震災で、津波が東北地方を襲い、その悲惨さを知ったニューオリンズの人たちが

『今度は私たちが恩返しをする番です』と支援の申し出をしてきました。そんな時、長年、東北で支援活動を続け、私たちの活動にも協力してくれていた仙台の佐々木さん



(写真上、左から)キング氏、外山夫妻。下は佐々木さん(左)と松本さん

から子供たちのジャズバンドの楽器がすべて流されてしまったことを知らされてきたのです。それを聞いてニューオリンズでは、私たちが楽器を贈っていた経済的には恵まれない家庭の子供たちも、すぐに支援コンサートを開き、ティピティナス財団とともに義援金を送ってくれたのです」

これらの義援金で楽器を購入、震災のまだ1ヵ月半ほどしか経っていないときに佐々木さんを通じて、まず気仙沼の「スウィング・ドルフィンズ」に送られた。それらの楽器で、東北各地から駆けつけたミュージシャンとともに気仙沼・総合体育館前の広場で被災者のみなさんを元気

づけるためのコンサートが開催された。



パネルディスカッションを終えて出演者と聴衆のみなさんが記念撮影に収まる。若者の姿が目立ったのも嬉しい限り

「この体育館の中には、テントがいくつも張られ、被災した方々が避難生活を送っておられました。ここで生活していたバンドのメンバーもいたのです。暗いニュースが続いた中でのコンサートで、まさに心温まる“音楽の力”を見ることが出来ました」と外山さん。

都心から車で2日かかり。青空に鯉のぼりが翻る風の強い日(4/24)だった。外山夫妻は、大喜びで出迎えた笑顔のバンドのメンバーと一緒に演奏に加わった。この子供たちが元気を取り戻して演奏する姿を見て、集まってきた被災者の人たちの目には涙が光っていた。現地でボランティア活動を続け、トラウマ(心的外傷)などの治療に当たっていた若い医師の言葉が、今も耳に残っている。

「被災者のみなさんの“心の傷”をマイナスからゼロに戻すのが私たちの仕事です。そこからプラスにもっていくの

は、みなさんの“音楽の力”なのです」と――まさに、このパネルディスカッション、いや今年の国際ジャズデイのテーマそのものだった。

松本さんがマイクを握る。「ジャズを心のよりどころにして頑張っている日米の子供たちの交流、それを実現するために支援させていただきました。この心の交流、文化の交流に携わった子供たちが、きっと明日を担ってくれることでしょ」と。

TOMODACHIイニシアティブを進めてくれたリチャード・メイさん、圓子博子さんも会場に

「その交流の発端になったのが、当時の駐日アメリカ大使の(ジョン・V・)ルースさんでした。ルースさんがツイッターで参加、支援し、実際に“TOMODACHIイニシアティブ”を主導してくれたのです」と外山さん。会場には、実質的に力を貸してくれた駐日アメリカ大使館の文化・交流担当官、リチャード・メイさん、圓子博子さんも姿を見せ、こ

このディスカッションを温かく見守ってくれていた。佐々木さんに代わる。「ここにドルフィンズの須藤丈市さんやドルフィンズのみなさんが

いらしてくれましたら良かったのですが…。みなさんに代わってお話しさせていただきますと、被災地での活動を紹介、「このような被災地での支援には、もちろん物理的な支援も必要ですが、心の支援も必要なのです。子供たちの笑顔を見て微笑むお父さん、その姿に癒される子供たち…人を動かし、感動させる、音楽には大きな力があるので

す」。恵子さんは、これまでの支援活動を総括した後、「この運動はルイを尊敬する私たちの本当に個人的なレベルで始めたのですが、ジャズを愛するみなさんとともにルイの精神、ジャズの強い絆がどんどん広がって行きました。それこそ音楽の力、ジャズの力なのですね。深い、深い絆を実感しました」

キング氏。「黒人と白人が音楽に乗って一緒にダンスをする…人種、国家、宗教、文化の違いを超えて人々が交流する。これが音楽の力なのです」。

会場の若い人たちに向かって呼びかけた佐々木さんの“締め”が良かった。「みなさんも、ぜひニューオリンズを訪ねて下さい。ニューオリンズは毎日毎日、いつでも、どこでも終日、音楽、ジャズ、ジャズなんですよ」と。イェー！

終わってニューオリ



「まるで同窓会のような感じ」と外山さんが親睦を深める中、リチャード・メイさん(写真左から2人目)と圓子博子さん(右端)といった駐日アメリカ大使館のメンバーも駆けつけてくれた=4月30日、大阪スクールオブミュージックで

大阪城西の丸庭園の特設ステージで約30人の大物アーティストらが共演した。⇒30日夜、大阪市中央区(大阪聴能撮影)

大阪城 5000人スイング

国内初「ジャズデイ」
世界的なジャズミュージシャンらが集う「インターナショナル・ジャズデイ2014」のコンサートが30日、大阪市中央区の大阪城西の丸庭園で開催され、約5千人の観客が体をスイングさせながら参加した。

国連教育科学文化機関(ユネスコ)などが音楽を通じた文化交流を掲げて2012年から主催しており、日本での開催は3回目となる今年が初めて。

ジャズピアニストのハービー・ハンコックさんや秋吉敏子さん、サクソフォーン奏者のウェイン・ショーターさんがライトアップされた大阪城を背景に「イマジジン」などを演奏。約30人の大物アーティストらによる約2時間半の共演は全世界にインターネット中継された。

コンサートは、平成32年に来阪外国人旅行者650万人の目標達成を目指す大阪観光局が誘致した。＝25面に「ジャズの絆」

東北の被災地&台風被害のニューオーリンズ

「楽器贈り合い」紹介

ジャズが結んだ絆

イベントは、平成6年にジャズ愛好者クラブ日比谷会館で始まり、2014年、東北の被災地とニューオーリンズを結ぶ「楽器贈り合い」が実現した。東北の被災地とニューオーリンズを結ぶ「楽器贈り合い」が実現した。東北の被災地とニューオーリンズを結ぶ「楽器贈り合い」が実現した。

東北の被災地とニューオーリンズを結ぶ「楽器贈り合い」が実現した。東北の被災地とニューオーリンズを結ぶ「楽器贈り合い」が実現した。

5月1日付の産経新聞(大阪)に掲載された『国際ジャズデイ』の記事。パネルディスカッションの記事(右)の方が1面の記事(左)より大きく、詳しくだったので外山夫妻もびっくり

ズ・ラスカルの川合純一さん(bj, vo)やDJとして関西で活躍するクリス・ノットさん、そして関西の会員の方々もやってくる。「なんか同窓会みたいですね」と外山さん、感動的な1日を締めくく

る。夫妻は、この日夜の横浜でのライブが入っていて、終了後、急ぎ足で新横浜に向かったが、感動的なシーンは、夜のコンサートの中でも再びクローズアップされた。

『国際ジャズデイ 大阪』のグローバル・コンサートは午後7時から9時まで野外の大阪城西の丸庭園・特設ステー

ジで開催された。前夜まで雨が降り続け、野外でのコンサートが心配されたが、この日は朝からカラリと晴れ渡った好天気。ライトアップされた大阪城を右手にのぞむ会場は7000人のファンで埋め尽くされた。

メイン会場でも日米被災地の交流にスポット！ 「楽器を贈って希望と音楽の喜びを与えました」

スーパースター達の熱い演奏が次々と繰り出され、小曾根真さんの熱演の後、会場が熱気に包まれていった中盤、サクソ奏者のケニー・ギャレットさんがステージの中央に進み出て、なんと日本語でこう話し始めたのです(写真右)。

「私が初めて日本に来たのは18歳の時でした。私は日本の文化、食べ物、伝統音楽が大好きで、日本語がちよっとしゃべれます」。外山夫妻が自宅に戻って主催者側が世界中に配信したコンサートの全中継を見て、驚かされたのは彼のこの後のスピーチだった。

「ジャズは目に見えない傷を癒してくれます。東日本大震災で被災し、津波で楽器を失った子供たちに日本とニューオーリンズのNPOはアメリカ大使館と共同で、被災地に楽器を贈って希望と音楽の喜びを与えました。今夜のコンサートが学生、先生、そしてコミュニティを勇気づけられることを望みます。ある人はこう言っています。音楽は土深く根ざした大きな木のように、その枝は大きく広がって人々を繋げてくれます。このことは『国際ジャズデイ』の精神と結びつきます…」

外山夫妻らの活動にはまったく触れられず、支援も抽象的にNPOの活動になったりしているが、ま、それはともかく…“2つの被災地のジャズ交流”という“歴史的な活動”が、“音楽の力”として1人歩きし、世界中に大きな枝を広げていったのは確かだろう。今後もきっとこの事実が『国際

ジャズデイ』の大きなテーマとして語り継がれて行くに違いない。私たちはその都度、その“歴史”を振り返り、思い出しに光を当てていけばいいのかも知れない。

サッチモ祭での寄金、心温まる過去の個人的な思い出を秘めた楽器たち、それらが外山夫妻の元に届けられ、楽器を無償で修理し、磨き上げた人たち、夫妻のもとからニューオーリンズへ無償で楽器を送ってくれた人たち…そんな“長い歴史”も、“800点の楽器”とか、“ニューオーリンズからの恩返し”の2つの言葉の中に集約されてしまったことのように、時が経つにつれ、“途中経過は省略”され、忘れ去られることが多い。そんなことをいま、思い起こしている。

この後、ギャレットさんは日野皓正さんと素晴らしい演奏をきかせ、最後にハンコックさんのピアノの伴奏で感動的な『イマジン』をレイラ・ハサウェイさんらヴォーカリストが次々、愛を込めて歌い上げた(写真⑤)。

♪ 考えてごらん、すべての人々がこの世界を分け合っているんだ…いつの日か、この世界は1つになっていくんだよ…。

<国際ジャズデイとは> 2011年7月、ハービー・ハンコック氏がユネスコの親善大使に任命され、4月30日が『国際ジャズデイ』と定められた。2012年4月、ハンコック氏とセロニアス・モンク・インスティテュート・オブ・ジャズ(TMIJ)が音頭をとって、パリのユネスコ本部とニューヨークの国連本部、そしてニューオーリンズのコンゴ広場をメイン会場に、ジャズの伝説的な人物を集めたイベントが開催された。これが第1回。

ユネスコの理念を持ち、“世界共通の言語”でもあるジャズ、教育手段として、また平和と団結、対話、そして人々の連携を強めるための手段としても、ジャズの素晴らしさを国際社会に知ってもらおうという趣旨。2回目の昨年は、トルコのイスタンブールがオフィシャル・ホスト・シティとなった。まだ人種差別が厳

しかった1930年代に、ワシントンの駐米トルコ大使は、アフリカ系ミュージシャンのために大使館を開放していた。また大使の2人のご子息は、初めてのジャズ・レーベル「アトランティック・レコード」を起こしている。ジャズの素晴らしさを世界中に広めていったトルコの貢献もあって、イスタンブールが昨年のホスト都市になった。今年、大阪市観光局が「アジアのジャズのハブ都市」として誘致に力を入れ、実現させた。



上の写真は、①小曾根真さん ②秋吉敏子さん ③ウェイン・ショーターさん ④日野皓正さん ⑤「イマジン」

出演者とともに『国際ジャズデイ 大阪』グローバルコンサートへ
「魅力あふれるステージオンパレードだった」
仙台から駆けつけた佐々木孝夫さんがホットな1日を特別寄稿

**プレッシャーを増幅させて大阪へ向かう
控え室にはあのハンコックら本物が…**

4月3日、セロニアス・モンク財団の代理人から突然のメール。“セロニアス・モンク財団より佐々木様の連絡先をいただきまして…”。半信半疑でしたが、きっと外山さんが何かしら関係しているだろうと、すぐに電話をしました。やはり外山ご夫妻も出席するということで、真実として受け止めることができたのです。それでも“きっと本命の誰かの都合がつかず回ってきた役回りだろう”なんて察するも、こんな栄えあるイベントに参加できることに興奮を覚えました。でも、どうも参加する教育プログラムのセミナーの意図が今ひとつ見えないところがあって、

日が近づくにつれてプレッシャーが増幅…そして4月30日、当日を迎えました。

伊丹空港に着くと出迎えの専用車で会場の「スクールオブミュージック」へ。外山さんご夫妻、国際交流基金の松本健志さんと無事合流。すでに会場では、ハービー・ハンコック、マーカス・ミラー両氏によるシンポジウムが始まっていて、ロビーのスクリーンにその模様が映し出されていました。午後の自分の出番まで用意された控え室は、出演関係スタッフ共用の2室、それがなんと講演を終えたハービー・ハンコック、マーカス・ミラー、ウエイン・ショーターの本物がそこにいるといった状況には本当に興奮しました。



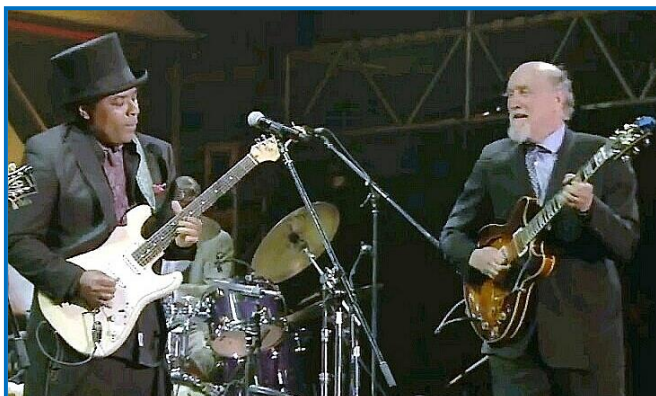
ハービー・ハンコックさん(中央)を囲んで、左から佐々木さん、松本さん、外山夫妻＝大阪スクールオブミュージックで

さて、セミナー出演の役目を無事終えほっと一息、後は夜のコンサートを楽しむだけとホテルにチェックイン。

会場まではバスが出るということで、18時少し前にロビーに行くと、なんと続々と出演ミュージシャンが集まってくる。会場までのバスは出演者と一緒のバスだったのです。ロビーでは、出演ミュージシャンの中でも楽しみにしていた一人、ギターのジョン・スコフィールドと片言英語で会話をすることが出来ました。実に紳士で奥さんをきちんと紹介してく

れました。車中ではもうディー・ディー・ブリッジウォーターが鼻歌交じり。

**それぞれの持ち味を活かして2時間！
ステージリハなしの熱演に驚かされる**



(写真上段、左から)クリス・トーマス・キング、ジョン・スコフィールド (下段左)オウモウ・サンガル (同右)シーラ・E

さて、コンサート内容について細部にわたり紹介したいのですが、会報の紙面が倍になってしまいますので、興味のある方は是非ネット配信されているライブ映像をご覧ください。それにしても、これほどのメンバーが2時間枠のコンサートでどんな形で出演するのだろうかと思像もできないでいましたが、それは、それはすばらしい構成で、それぞれもミュージシャンの持ち味を活かしたすばらしい内容でした。秋吉さん、日野さんの素晴らしい演奏、後半はハービー

・ハンコック、マーカス・ミラー、シーラ・Eが中心となったリズム的な演奏でピークに、そしてアフリカ・マリのシンガー、オウモウ・サンガルの河内音頭を思わせるナンバ

ーから全員によるファイナル『イマジン』まで…どれをとっても魅力あふれるステージのオンパレードでした。それにしても。開演1時間前に会場入りし、何のステージリハもなくあんなすごい演奏が出来るとは、さすがに超一流だなと、ただただ驚かされるばかりでした。

さて、帰りはどうするのだろう。これがまた、打上げ会場として用意された別のホテルの会場までまたバスにてご同伴。会場は、打ち上げというよりは、誰のスピーチもなく、ただひたすらビュッフェ・スタイルによる合同夕食会といった感じ。お互い同士が歓談しながらのひととき。英語力と度胸さえあればどのミュージシャンとも歓談

を楽しむことができます…。ああ、何とも情けない、もったいない。それでも何とか松本さんの通訳を介して、もう一人のお目当て、ここ数年オジサン族にも人気が高い女性ベーシストのエスペランサ・スポルディングとの“鼻の下が長い”ツー・ショットを撮らせていただくことができました。すみません。ミーハー・レポートになってしまいました。

さて、今回のジャズデイの趣旨は、ハービー・ハンコックの著書『ジャズと仏法、そして人生を語る』にも書かれているように、「アフリカから強制的に連れてこられた黒人奴隷の過酷な状況の中でブルースやジャズが生まれ、

それが世界中で受け入れられることによって黒人の地位が高まり、世界の平和や調和を生み出す大きな役割を果たしている」といった内容でした。その一つの証「カトリナと東日本大震災、ニューオリンズと東北の子どものちのジャズ交流」というストーリーと繋がられたわけです。

このような栄えあるイベントでパネラーを務め、世界の超一流ミュージシャンとご一緒できたことは、私の音楽にまつわる人生の中では最高！ 15年前、バンクーバー空港のロビーで遭遇し、形振りかまわず抱きついたジョニ・ミッチェル事件？ 以来の記憶に残る大きな出来事となること間違いなしです。(ちなみにハービー・ハンコックは07年、このジョニ・ミッチェルへのトリビュート・アルバム「River : The Joni Letters」でグラミー賞の年間最優秀アルバム賞を受けております)

2005年、カトリナの支援

先として出会った WJF と外山さんとのお付き合いが毎年のように思いもしないサプライズを呼び起こしています。これはまさに外山さんが言う“サッチモのイタズラ”なのでしょう。

さて、来年の4月30日には、「International Jazz Day TOHOKU 2015」開催！ 東北出身・東北にまつわるミュージシャンを集めて開催！ …なんて途方もない夢を見、未だほろ酔い状態が続いている今日この頃であります。

(次のページに「国際ジャズデイ 大阪」を振り返って…外山夫妻から皆さまへの感謝の言葉)



佐々木さんをミーハー化させたエスペランサ・スポルディング。ウッドベース、エレキベース、さらには「イマジン」まで熱唱した。写真左上は、ディー・ディー・ブリッジウォーター、エスペランサ、サンガル、マーカス・ミラー(左から)

デキシード・ジャズの祭典 MIN-ON JAZZ SELECTION LIVE

外山夫妻がニューオリンズに滞在(1968~73)中から温かく見守ってきたシャノン・パウエル(ds)=1962年生まれ=が率いる本場の生きのいいバンドが、民音の招きで日本にやって来る。6月18日に来日、20日の平塚市



民センターを皮切りに7月4日、中野サンプラザホールなどで3週間にわたって、各地を回る。そのナビゲーターが外山夫妻。彼は夫妻のことを「お父さん、お母さん」といっているほど。なんともしなやかなライブ。詳細は、下記の民音 HP で。

http://www.min-on.or.jp/play/detail_10587.html

魔法のように世界に広がった善意

『国際ジャズデイ 大阪』を振り返って

——外山喜雄・恵子

セロニアス・モンク協会から突然のメール

昨年4月30日、皆様の暖かいご協力でユネスコの国際ジャズデイ参加コンサートを渋谷・伝承ホールで開催させていただきました。その際、翌2014年は大阪開催…とかいう噂を聞いたのですが、すっかり忘れてしていました。

国際ジャズデイをユネスコと共に主催するセロニアス・モンク・インスティテュートのウィル・ラムゼイ氏から突然メールが入ったのが今年の3月18日。日本ルイ・アームストロング協会が進めてきたニューオリンズの子供たちへの楽器贈呈とハリ

ケーン・カトリナ被災の支援、東日本大震災後恩返しに贈られてきた楽器、その後のニューオリンズと東北の子供たちとの被災地相互訪問の交流が、『国際ジャズデイ 大阪』のテーマに最適の話題なので、是非パネル・ディスカッションに参加していただきたい、そして、気仙沼スウィング・ドルフィンズの須藤丈市先生のメールを教えてくださいという事でした。しかし、須藤さんと子供たちは平日開催であることから出席がかなわなかったのは残念でした。

当日のメインテーマにも膨らんでいて…

最初のメールでは、単にジャズデイのエデュケーション・プログラムの一つの講座として取り上げられた…そんなイメージで、この私達のジャズデイ参加がスタートしたものでした。ところが、日がたつにつれてわかってきたのは、日本ルイ・アームストロング協会が皆様のご協力で実現することが出来た日米の子供たちの交流が、なんと大震災を被った日本とハリケーン・カトリナで被災したジャズの故郷ニューオリンズとを結びつけ、大阪で開催される国際ジャズデイのメインテーマとして取り上げられていたことでした。実のところ、私たちのまったく知らない間に、この日米被災地のジャズ交流の話が独り歩きし、大阪そして日本で開催される世界的ジャズイベントを大きく特徴づける象徴となっていたわけです！！

こうした世界の舞台に取り上げられたきっかけは、国際交

流基金とアメリカ大使館TOMODACHIイニシアティブ、そしてニューオリンズのティピティナス財団、宮城音楽支援ネットワークの佐々木孝夫さんらのご協力で2012年、2013年とニューオリンズと宮城の子供たちにプレゼントできた『ニューオリンズー宮城青少年ジャズ交流』。この話題を、国際交流基金のご担当者、松本健志さんが、ニューヨークからハーレム文化を発信、ジャズデイの大阪開催の立役者となったカツツ・アベ(阿部勝弥)さんに伝え、アベさんの心の琴線に触れこと。また、アメリカ大使館のTOMODACHIイニシアティブご担当者文化・交流担当官、リチャード・メイさんも、この交流を強く国際ジャズデイ主催者に推薦して下さった…という背景がわかったのです。

素敵な連携プレイで最大限の効果を発揮

私達が皆さまに応援していただき、“サッチモの孫たち”への『銃に代えて楽器を！』の運動を続け、カトリナ被災のニューオリンズを支援し、東北大震災にニューオリンズからドルフィンズらへの恩返しの楽器が届き…それぞれ、関係者全員…日本ルイ・アームストロング協会とご協力下さっている皆様、ニューオリンズの人々とティピティナス財団、国際交流基金、アメリカ大使館、仙台の佐々木さん、メディアの皆様…が素敵な連携プレイで最大限の効果を発揮して、翔んだわけです！！

国際ジャズデイまでの1ヵ月間、そしてジャズデイ当日…魔法のように世界が広がった驚

きの毎日。大震災から1年目2012年3月8日、ケン・川島記者がジャパントゥタイムズに掲載して下さった英文記事、『津波で引き裂かれ、ジャズで結ばれ』(Torn apart by disaster,

bound by jazz)のコピーを、ジャズデイ当日の朝、ユネスコ親善大使でもあるハービー・ハンコックさんほか、出演者の皆さんに差し上げました。ハンコックさんは、ベース奏者のマーカス・ミラーさんとの対談で、この新聞記事を高くかざして、この交流を賞賛、紹介して下さったのです。

元産経新聞、夕刊フジ記者でWJF理事、会報編集をして下さっている小泉良夫さん(ハンコックさんと写真上)が取材に同行して下さり、感激のジャズデイの模様を、このように会報81号に掲載、皆様にお礼のご報告ができたことを心よりうれしく思っております。

心より、皆様にお礼を申し上げます。有難うございました。



律子夫人からジャズ博物館に多額の寄金

——故増山瑞比古氏が天国から支援！？

5月末日現在、義援金は100万円を突破

ニューオリンズの「ルイジアナ州立博物館」(Old U.S. Mint=旧造幣局)3階にあったジャズ展示コーナー「ジャズイクスピット」(通称:ニューオリンズ・ジャズ博物館)の復興・

再開を日本からも支援しよう！前号の会報「80号」や外山夫妻の呼びかけに応じて、WJF会員のみなさんをはじめ、全国のジャズファンからさっそく義援金が多額寄せられた。なかでも外山夫妻が目を見詰めたのが故増山瑞比古(みずひこ)氏の律子夫人からご寄付だった。なんと50万円！その振込用紙を見て夫妻は、一桁間違っただけではないかと目を疑ったほど。

5月末日現在、義援金の総額はすでに100万円を突破している。今年の「サッチモの旅」(7月30日～8月9日)で夫妻が直接、ニューオリンズに届けることになり、第1次締め切りは一応、6月30日とさせていただいているが、引き続きご寄付を！！

お世話になった増山さんを偲んで… 2005ニューオリンズへの「同窓生」

そんなこともあって、ちょっぴり在りし日の増山さんの面影が甦った。WJFの賛助会員でもあった増山さんは2006年、壊滅的な被害をもたらしたハリケーン・カトリーナがニューオリンズを直撃した翌年の2006年「サッチモの旅」に加わった。当時は私(小泉)、増山さんのことをよく存じ上げていなかったが、増山さんは早稲田大学(ラグビー蹴球部)出身、宇都宮商工会議所の副会頭、人材派遣会社フジスタッフの創業者で社長、ホテルに聖書を無料配布などしている日本国際ギデオン協会の全国会長、ラグビー関係など、大変な要職についておられた。そんなことはまったく素振りにも出さず、いつも控えめ、にこやかに振舞われておられた。



写真上は、ミヤ・ジャズインの増山さん(中央) 下は、増山さんを偲んで、中村宏ご夫妻(左)ら「サッチモの旅」同窓生=いずれも2006年11月4日、宇都宮で

ニューオリンズのセント・オーガスチン教会で生まれたサッチモの「ジャズ・ミサ」のさい、敬虔なクリスチャンの増山さんは献金をきちっと封筒に入れてカゴに収められ、きつここれも多額な献金だったと思う。

ミヤ・ジャズイン2006～7の実行委員長 パレードの先頭に立ちセインツが続いた！



パレードの先頭に行く増山さん、セインツが続く=2007年11月3日、宇都宮市で

「餃子でよろしければ、いくらでもご馳走しますから、今度ぜひ宇都宮にいらしてください」という増山さんのお誘いに乗って、「サッチモの旅」同窓生が揃って行きましたねえ、2006年11月の「MIYA JAZZ INN」へ。この年、増山さんはミヤ・ジャズインの実行委員長！“花傘”を手をセインツなどのバンドのパレード先頭に立って商店街を回った。セカンドラインも長々と続く。「ジャズの故郷」ニューオリンズを救おうとの支援の手もさしのべてくださった。

みんなで餃子に舌鼓を打ち、ワインやカクテル(宇都宮はカクテルの街でもある)を味わいながらメインステージでのセインツの演奏を楽しむ。吉原郷之典さん(tb)の「スインギンハード・オーケストラ」の演奏もありました。そんなイベントのあと、増山さんがみんなにご馳走して下さったのが、餃子どころか豪華なレストランでのディナー。いやあごちそうさまでした。翌2007年も増山さんが「ジャズイン」の実行委員長を務められた。

2011マラリアにかかって突然の旅立ち ご存命だったら東北支援に尽力もされ…

その後も、各方面でのご活躍を聞いてはいたが、お会いする機会もないまま、西アフリカ・ガーナから帰国後、悪性マラリアにかかって2011年3月5日、多臓器不全で、あっという間に亡くなられた。東日本大震災(3/11)の直前のことだった。もし増山さんがご存命だったら、津波で楽器を流された子供たちバンドの支援、日米ジャズ交流にどんなに力を貸して下さったことか。

ニューオリンズ・ジャズ博物館の復興支援に多額の義援金を寄せていただいたのも、増山さんの天国からの声に違いない。謹んで Amen!



左の写真は、2006年8月2日、「サッチモの旅」でニューオリンズのルイ・アームストロング国際空港に着いた際、我々を出迎えてくれたTBCプラスバンド一行と記念写真に収まる増山さん(左端)。右端で紙(WJFが寄贈した1000ドルの小切手)を掲げているのがブランドン・フランクリン君。同時に寄贈されたサクスを涙で受け取り、バンドの指導者としても成長、みんなに親しまれていたが後日、事件に巻き込まれて射殺されてしまった！

=16面にご寄付関連

ジャズ界などから多士済済…ユニバーサル・ミュージック社に参集

『サッチモは世界を廻る』フル・バージョンなど2本、本格上映

感動、感激、驚き…後日、みなさんから次々と感想も寄せられて…

ジャズ界を代表するミュージシャン、ジャズ評論、ジャズ関連出版、各地のジャズ祭、レコード業界関係者、ジャズファン…さらには国際交流基金、アメリカ大使館からの参加もあり、なんとも大がかりな広がりを見せた『サッチモは世界を廻る』のフル・バージョン+ベトナム戦線へ派遣される米兵士達を慰問したサッチモのコンサートの米TV番組『オペレーション・エンターテインメント』の2本の映写会が、3月10日、東京・青山1丁目のユニバーサル・ミュージック社で開催された。会場となったのは同社2階会議室。大型ディスプレイに最新のデジタル・マスタリングした映像が映し出された。これまでのプロジェクターで投影した映像よりもさらに鮮明な映像。サウンドも、さすがに半端ではなかった。

(外山喜雄)

この映写会は、早大ニューオルリンズ・ジャズクラブOBで、外山喜雄、恵子の後輩にあたるユニバーサル・ミュージックご勤務の斎藤嘉久さん、同社OBで青野ミュージック代表、青野浩史さんのご厚意で、ジャズ、音楽ご関係者向けのプレミアとして実現した。ご出席者は、デキシーからモダン、グレン・ミラーも、クラシック界もあり、ジャズ祭主催者、ジャズ評論、学生ジャズ研OB、米国大使館、国際交流基金等々、集まったみなさんのどの顔にも、感動、感激、驚き…複雑な感情が入り乱れた素晴らしい映写会となった。



午後6時開場前の5時には、斎藤さん、青野さん始め、WJFスタッフ、デキシーセインツのメンバー、早大OBで会員の星野正典さんらも会場に集合。椅子のセッティングやら、この日みなさんに手渡す解説リーフレット、WJF会報(77~80号の4部)、新作のサッチモ・コースター、サッチモのメモ用紙、お茶のボトルなどを整えるなど大忙し。次々来場され、これらを手渡されたときの“ジャズ・セレブ”のみなさんの笑顔が忘れられない。午後6時半、開演。

サッチモ初来日の思い出話した中村宏さん 湯川さん「私は、アーニーパイルで見た！」

ユニバーサルの斎藤さん、そして青野さんに続いて外山喜雄・恵子からご挨拶(写真上と左)、ジャズ界を代表するみなさんに、不滅のサッチモ映像をご紹介できる感激を新たに。1967年12月、ベトナムへ向かう兵士たちを前にテキサス州フォート・フッド基地で演奏された、サッチモのワンダフルワールドのテレビ映像(写真下)に続き、中村宏さん(1960年代NY勤務、60年代のSJ誌等に記事多数)が、サッチモファンの草分け、そして、この日ご出席の中で数少ない“1953年12月サッチモ初来日

超ド級のジャズ界関係者も揃って

映写会ご出席は次の皆様…青木秀臣様(グレン・ミラー生誕地協会)、青野浩史様(青野音楽事務所)、内池正名様(慶応軽音楽研)、内田晃一様(ジャズワールド)、岡崎正通様(ジャズ評論家)、小川隆夫様(ジャズ評論家)、菊田有一様(ディスクユニオン専務)、幸田稔様(ジャズスポット J)、斎藤嘉久様(ユニバーサル・ミュージック)、坂之上京子様(ボロンテール)、佐藤修(元日本レコード協会会長)・美智子ご夫妻、佐藤美枝子様(日本ポピュラー音楽協会)、篠原由香里様(国際交流基金)、柴田浩一様(横濱ジャズ・プロムナード)、東海林幹雄様(ソールユニオン)、杉田宏樹様(ジャズ評論家)、鈴木雅清様(慶応軽音楽研幹事)、高木信哉様(ジャズ評論家)、高桑敏雄様(横濱ジャズ・プロムナード)、富澤えいち様(ジャズ評論家)、中村宏(医学博士、日本ルイ・アームストロング協会名誉会長)・美代子ご夫妻、中村誠一様(ジャズミュージシャン)、中村沙理様(中村様ご令嬢、ジャズシンガー)、永谷正嗣様(新宿ジャズ祭代表)、西松実様(新宿ジャズ祭会長)、原朋直様(ジャズミュージシャン)、原田和典様(ジャズ評論家)、平井昌美様(早大ニューオルリンズOB)、星野正典様(早大ニューオルリンズOB会長)、松尾勇人様(民音)、松田裕美子様(クラシック・ピアニスト)、松田恵理子様(アーリージャズ愛好家)、松村善一様(九段ライオンズ・クラブ)、松本健志様(国際交流基金米州チーム長)、圓子博子様(米国大使館)、望月俊明様(早大ハイ・ソサエティ・オーケストラOB会長)、森忠彦様(おきなや徳熱顧問)、安本ヒロユキ様(InterFM)、油井正太郎様(油井正一氏ご子息)、悠雅彦様(ジャズ評論家)、湯川れい子様(音楽評論家)、渡辺一勝様(ジャズ愛好家)、日本ルイ・アームストロング協会スタッフ(奥村清文、細川ハテミ)、外山喜雄とデキシーセインツ・メンバー(粉川忠範、サバオ渡辺、山本勇、藤崎羊一、広津誠各氏)ほか多数のみなさん。あるジャズ関係者がこの出席メンバーをご覧になり、超ド級のジャズ界関係者の顔ぶれ…と感想を述べられました！



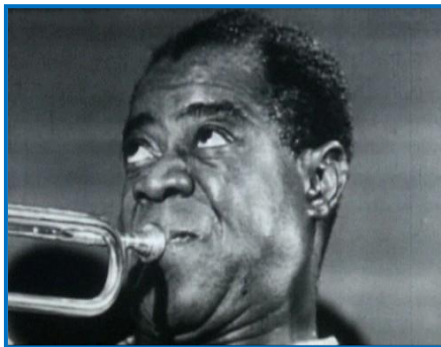
の“目撃者”のお一人として当時の思い出を楽しくスピーチ。そこへ、映写会当日、突然ご出席くださり、最前列近く座った湯川れい子さんの手が上がり、「私も、見ました、アーニーパイルで…」に場内騒然！湯川さんは大のサッチモファンで、サッチモ初来日の1953年当時はまだ中学から高校生くらいだったが、アメリカ軍の将校さんと友達になり、アーニーパイル劇場(宝塚劇場が当時米軍に接收されアメリカ人専用の劇場となっていた)に入れて



もらってサッチモをご覧になったとか。飛び入りで懐かしそうにスピーチをしてくださり、とても楽しそうでした！！

上映後、サッチモの偉大さ語った佐藤修さん 黒人社会からも差別された彼の無念さ思い涙

そして1965年～56年、世界を音楽大使として廻ったサッチモのドキュメンタリー、『サッチモは世界を廻る』(原題: サッチモ・ザ・グレート)を上映。冒頭のサッチモの大写しの画面(写真右)、そして迫真の「バック・オ・タウン・ブルース」の演奏…映像が映し出されると、会場はシーンとして声もなく、感動の1時間6分、ルイ・アームストロングの世界にみなさん吸い込まれるように画面を見つめていた。



さらにポニーキャニオン、日本BMGビクター社長、日本レコード協会会長など要職を歴任された佐藤修さん(世界的ルイ・アームストロング・コレクターで日本ルイ・アームストロング協会名誉顧問)は、映画を見た感動をそのままにサッチモの偉大さを語っていただきました。その偉業にもかかわらず白人優先の社会で黒人として差別され、また、黒人からは白人にへつらう黒人として誤解され、理解されないこともあったサッチモの辛かっただろう気持ちを語るとき、感極まってスピーチで号泣しそうになり、会場でもらい泣きされた方も、多くいらした！

(会場写真は、細川ハテミさん撮影)

——後日、こんなご感想が私たちのもとに(要約)。

<ジャズライター、原田和典さん>

映画、初めて拝見しました。感激です。

「ジャズってなんですか？」と問われたら、「これを見てください」といいくなるほどです。

この作品を学生時代にご覧になった外山さんがうらやましいです。

ラストのライブもハッピーで最高でした。

ドラムセットがなくても、椅子だけであんなにスイングするとは！

<横濱ジャズ 柴田浩一さん>

びっくりするほど音も良かったです。

サッチモはむろんですがプランジャーを使わないタイラー・グリーンやトラミー・ヤング、エドモンド・ホールが動いてとても嬉しかったです。

感動的だったのはアフリカでの踊りとやはり W.C. ハンディですね。よくぞ、ハンディをこのコンサートに招待してくれたといいたいし、カメラも良かった。機会を作ってくれたことを感謝しますと共に、又の映写会を期待したいと思います。

<ジャズ評論家、岡崎正通さん>

今日の昼間、横浜で柴田さん(横濱ジャズ)や原田(和典)君とも会う機会があり、きのうは凄かったね…となりました。あちこちでしゃべりたいです。でも、どこで見られるの、となるので(笑)。

<トランペッター、原朋直さん>

素晴らしい映像が今でも頭に残っています。

あれだけの会ですから、とても準備が大変だったろうと想像しています。

いろいろな意味で大変勉強になりました。

また何かありましたら、是非お声がけください。

<サクソ奏者、中村誠一さん>

私、あれ昔、見た事あったんですけど、飛行機の中での演奏とかアフリカの歓迎とか覚えていました。なんか、映画の合間に見たような気がいたします。

それは、さておき昨日は、サッチモもですがエドモンド・ホール、良かったです。凄いですね。楽器は、鳴りまくっていますね。リズムも素晴らしい。エヴン・クリストファーが相当コピーしているのがわかりました。

まだ、色々ありますがサッチモがジャズを世界中にひろめたのは、間違いのないですね。愛に溢れた偉大なお方ですね。

<音楽評論家、湯川れい子さん>

今、サントリーホールの舞台の袖で書いています。今夜は「全音楽界による音楽会」、東北のための大チャリティ・コンサートです。サッチモ、アーニーパイル、1953年ですか…ということとは、昔、私が年齢を3歳さば読んでいた時は14歳、中学3年ですが、今は実年齢をカミングアウト。それで計算すると私は17歳。高校2年生。有楽町のコンボに出入りするようになるちょっと前だったんですね。またしっかり調べて見ます。本当に楽しい夜でした！

<ジャズ評論家、悠 雅彦さん>

一度アテネフランセで拝見して感激しましたが、何度見ても感動します。若いレニー(バーンスタイン)の情熱的な指揮～「West Side Story」の根っこにあるものがそのタクトに光っているのが、また私には見えました。

次の日、映画『それでも夜は明ける』を見て、思い切り泣きました。ルイにとっては恐らく脳裏から消えないアフリカン・アメリカンの歴史そのものでした。それをルイは表にださず、「Black And Blue」を歌うのです。心では泣いていたでしょうに。ぼくにとっても幾つかの思い出があります。初めてアメリカにいった1970年のニューポート・ジャズ祭で病癒えたばかりのルイのステージを見たのですが、そのとき中平さんにぼくのカメラをお貸ししたのです。おかげで、ぼくは彼の写真をとる機会を失いましたが、でもいい思い出です。

<ジャズ評論家、小川隆夫さん>

W.C. ハンディの姿にも感激しました。

わたしのラジオ番組出演も含めて、今後ともよろしくお願いいたします。

<セインツのメンバー、サバオ渡辺さん(ds)>

(今回スタッフとしても手伝っていただきました)

あの映画は、最初から最後までちゃんと見たのは初めてでしたが、感動しました。

ジャズをやっていくという事に対して、とても大きな勇気をもらえた気がしました。

佐藤修さんが、話の途中でこみ上げたのは、サッチモが白人社会に認められ、世界に認められた事の功績に対して、やっかみや無知、偏見差別によって白黒双方の社会から与えられた多くのプレッシャーや苦労の中で、笑顔に隠したサッチモの本当の苦悩に思いをはせたのでしょうか。広津さんが、「思わずもらい泣きました」という気持ちもよく分かります。

外山喜雄・恵子夫妻から

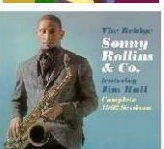
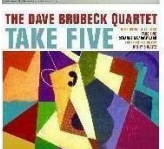
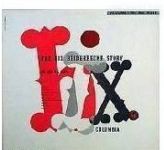
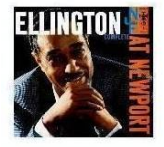
こうした機会を通じて、ジャズ界、音楽界を代表する皆さんにサッチモの素晴らしさを伝える、こうした映像を見ていただき、将来一般公開の機会を拓げられれば、と思っております。皆さんに感動していただけたこと、非常に嬉しく思っております。

**G.アヴァキアンさん、95歳！
お誕生日、おめでとうございます**

1919年3月15日生まれです！！

外山夫妻のもとに夫妻と親交のあるニューヨークのルイ・アームストロング・エターニティー・バンド、デイビッド・オストワルドさん(リーダー、tuba=写真右上、アヴァキアンさんと)から元コロンビアの伝説的なプロデューサー、ジョージ・アヴァキアンさんの近況が知らされてきた。

それは写真多数を添えたアヴァキアンさん、95歳の誕生祝賀パーティーの様相だった。会場は、毎年のように「サ



ッチモの旅」で訪れ、ジャズファンにもお馴染みの著名なニューヨークのライブハウス「バードランド」。

氏の誕生日は1919年3月15日、でも今年はそのころアヴァキアンさんが、ちよっぴり心臓に不安もあって入院中だったため、1ヵ月遅れの4月10日になり、元気になったアヴァキアンさんを迎えて盛大に催された。

全盛期の巨匠たちとともに歩いて

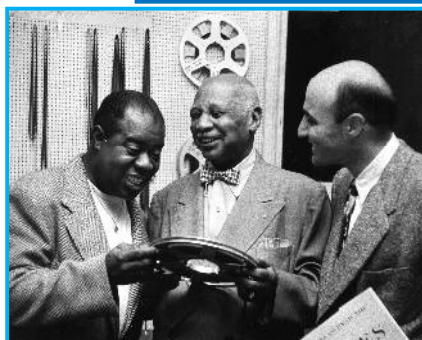
オストワルドさんのメールには、アヴァキアンさんの全盛時代、サッチモやW.C.ハンディ(『セントルイス・ブルース』などの名作曲家)やマイルス・デイヴィス(tp)との歴史的な記録写真(写真中央の左側)も添えられていた。彼から送られてきたアヴァキアンさんの誕生祝いコラージュにあったジャケット写真(左端の8枚)を見ただけでも、アヴァキアンさんがジャズの歴史に残した偉大な足跡を垣間見ることが出来る。

この日のケーキカットでは、CDがケーキカットのナイフ代わりに使われた(写真中央上段=写真提供:マルシア・ソルターさん)



「サッチモの旅」でも毎年のように合流

アヴァキアンさんは、毎年のように真夏のニューオーリンズの「サッチモ・ジャズフェスト」に駆けつけてくれている。私たちの「サッチモの旅」でも御一緒したことが少なくなく、みなさん“家宝”ともなりそうな記念写真を撮らせていただいた。この外山さんご夫妻との写真(最下段)は、2008年8月、「サッチモの旅」でニューオーリンズのサッチモ・サマーフェストを訪れた際、同会場での一コマ。ほんと気さくで、にこやかな方なのです。

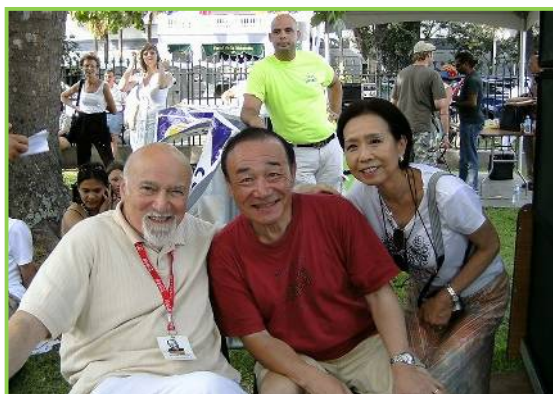


昨年もサマーフェストにご夫婦共々、車椅子で来られた。ニューオーリンズからニューヨークへお帰りになるときも、われわれ「サッチモの旅」一行と同じヒコキー。別れ際にご子

息の押す車椅子から手を振って「See you next year!」と微笑んでおられた。

写真中央の右上段は昨年、ルイ・アームストロング・ハウス・ミュージアムで開催されたガラ・パーティーに姿を見せクインシー・ジョーンズと写真に収まるアヴァキアンさん。同下段はアヴァキアンさん夫妻(前列中央)を囲んだパーティー参加者のみなさん=バードランドで。

写真中央の右上段は昨年、ルイ・アームストロング・ハウス・ミュージアムで開催されたガラ・パーティーに姿を見せクインシー・ジョーンズと写真に収まるアヴァキアンさん。同下段はアヴァキアンさん夫妻(前列中央)を囲んだパーティー参加者のみなさん=バードランドで。



(NYCでの写真提供は、デイビッド・オストワルドさんとマルシア・ソルターさん)

(左側のジャケット写真は、ジョージ・アヴァキアンさんプロデュースで、上から「ルイ・アームストロング プレイズ・W. C. ハンディ」「サッチ・プレイズ・ファッツ」「マイルス・アヘッド」「ボブ・ニューハート」「エリントン・アット・ニューポート」「ピックス・バイダーベック・ストーリー」「ブルーベック テイク・ファイブ」「ソニー・ローリンズ ザ・ブリッジ」)

日本にはお馴染みのジャズ評論の泰斗 瀬川昌久さん、卒寿を迎えて…

偉大な米コロンビアの伝説的プロデューサー、ジョージ・アヴァキアンさんの95歳！誕生日祝賀パーティーを左ページの12面でご紹介したが、日本の音楽界にも大変な御大がおいでになる。ジャズ評論界の泰斗、瀬川昌久さん(1924年生まれの90歳!)。その卒寿を祝うコンサート…などと言うことは、ご本人はまったく煙たがって避けておられたようが、周囲がほっておくわけはありません。卒寿などは表に出さないことにして、ステキなコンサート…というかバラエティー・ショーが**6月17日、渋谷・文化総合センター大和田伝承ホール**で開催されることになった。題して『**瀬川昌久 presents—サッチモから日本のジャズ・ソングまで—**』。まさに瀬川先生半生のライフワーク総集編を見させていただけるに違いない。

(当日の詳細は次号の会報で)

アヴァキアンさんと比肩する著作群 日本のJAZZを描き、語り続けて…

まず、右と下の写真をご覧ください。これらは瀬川さんの著作物と氏が監修されたレコード、CDの一部。これだけでもお分かりのように、瀬川さんは特に日本のジャズに関するレコードの監修とご著書は、まさにアヴァキアンさんと比肩する。

そんな瀬川さんは、WJF発足当時(1994年)からもう20年もの長い間、WJFの活動を理解され、会員としても支援して下さっている。この会報の山口義憲編集長によると、1997年2月14日に開催された第7回例会には、池上悌三、いソノテルヲ、岩波洋三(いずれも故人)、中村宏といったみなさんとともに参加していらっしやる。このときはゲストに伝説のピアニスト、サー・チャールズ・トンプソン夫妻やジャズ絵画の第1人者、久保幸造画伯の姿もみられた。

そんなご縁もあって以後、1998年7月4日、瀬川さんの監修/解説による「サッチモ生誕100年へ向けてのシリーズ・コンサート“ジャズ創世記への旅”」(5回シリーズ)をはじめ、「サッチモ・ワンダフル・オン・フィルム」(5回シリーズ)などの例会が次々と立ち上げられた。

なかでも、“ジャズ創世記への旅 第3回”「甦る昭和のジャズサウンド/日本のサッチモ、南里文雄と日本のジャズ創世

記」(2001年1月18日、アテネフランセ文化ホール)や芸術祭参加「ルイ・アームストロング生誕100年、ジャズ創世記への旅」(シリーズ総集編=2001年10月25日、銀座ヤマハホール)などは、瀬川さんならではの秀作ではなかったろうか。



各種例会の監修をして、貴重な解説もしていただいた瀬川さん(右)と、常に例会などの司会を努めている山口編集長

2007年1月11日、アテネフランセでの例会「1925年～34年サッチモの黄金時代」で監修/解説に当たった瀬川さん、「ルイはね、このような甘いサクソ陣の前でトランペットを吹くのが、何よりの幸せだったんですよ」と。さらに2009年7月12日、WJF創立15周年の集いで瀬川さんは「外山さんは、ルイの音楽を系統立てて紹介、デキシーだけでなくスイングからモダンジャズにいたるまで、ルイの及ぼした影響を

しっかりとたどってくれています」と称賛。まさに日本におけるサッチモ、日本のサッチモ、日本ルイ・アームストロング協会には、瀬川さんこそ欠かせない存在なのです。

瀬川さんは『JAZZ I Love』のチラシのなかで今回の<プロデュース意図>として、このように書かれている。

<「ビーバップ以降が真のジャズ」というジャズ界の根強い偏見を打破するため、日本のサッチモたる外山喜雄とデキシー・セインツに“サッチモ・ジャズ”の真髄を演奏して頂き、その影響を受けた日本のJAZZソングとタップダンスを楽しく表現します。ジャズ・エンタテインメントの極上の魅力をお伝えしたいと思います。>

第1部は、菊地成孔さんのオープニング・トーク(JAZZ史に残る名演・名唱と影響された日本のJAZZソングのヒット曲を再現!)
第2部は、JAZZとタップダンス(フレッド・アステア流タップ・ダンス・ショー)

第3部、戦後来日して大評判となったサッチモ・オールスターズとジョージ・ルイス。

司会は、懐かしい鈴木治彦さん
外山さん秘蔵の未公開映像もあって、オールドファンには見逃せないイベントとなっている。若い方々にもぜひ見ていただきたいですね。



膨大な資料に囲まれる瀬川さん=東京・新宿区のご自宅で



(写真右上から) 著作の「シャープス & フラッツ物語」「ジャズで踊って」「ジャズに情熱をかけた男たち」「日本のジャズ誕生」。(下辺のレコード、CD)は「ニッポンジャズ水滸伝」「戦前モダン・ミュージック集」「日本のジャズ・ソング集」「ジャズ・イン・ジャパン 1947-1963」(9枚組 CD)

篠田次郎さんがメルマガで披露した…

サッチモの仙台ジャズコンサート秘話

WJF会員で宮城県出身の宮城健さん(東京・練馬区在住)から外山夫妻のもとに素晴らしい情報が送られてきた。篠田次郎さん(湯島吟亭亭主)という方が出されている『メルマガ「吟亭だより」』(平成26年5月号 Vol. 143)に氏がお書きになった「サッチモのちょっといい話」風の秘話。宮城さんは、仙台の定禅寺ストリートジャズフェスティバルなど、あちこちに気軽にお出かけになり、常々WJFに貴重な情報を届けてくれています。今回もまた最高の情報! その転載許可まで取って下さった。外山さん、感激して曰く「ルイ(類)は友を呼ぶデス!!!」。

華やかだったジャズコンサート 大学時代も福島から仙台へ

少年時代の音源はラジオ、それもFENであった。民放が立ち上がる前、FENは第三放送と呼ばれていた。だが、英語はカラシキだめ。それでも、第一、第二放送より聞き応えがあった。

近頃、とんと聞かないが、一時期、ジャズコンサートというのが流行りましてね。月一回ぐらいの間隔だと思っていましたが、いま思い出してみると、月一回じゃ主催者、演奏家がたいへんだと思いますよ。だから、隔月ぐらいかなあ。

この読者で、ジャズコンサートという言葉を知っている人は、日劇ジャズコンサートを思い浮かべるでしょうが、私がいうそれは、仙台で開かれていたやつです。

高校在学時から聞いていたような気がしますが、そうだとすると昭和25年か。26年は、8月に大学進学を決心し、好きな映画をやめたくらいだから、ジャズコンサートにもいかなかったでしょう。そうすると、福島大に進学したあとかなあ。福島から仙台にコンサートを聞きに通った(仙台が生家ですからね)ものです。これは確かです。

さてその仙台のジャズコンサートですが、それは日劇のよりよかったと言われています。日劇ジャズコンサートを知る人は、「本家より分家がいいはずはない」とおっしゃるでしょうから、手の内(日本のジャズ史にも記されていない話)を披露しましょう。

仙台には米国第9軍司令部があって 芸能タレント仕出し屋「マナセプロ」も

当時、仙台には米国第9軍司令部がありました(北一番丁・旧簡易保険局ビル)。それが、仙台の川内キャンプ、原ノ町キャンプ、そして東北地方の米軍キャンプ(青森・三沢、山形陣町など、ほか不明)を統括していたのでしょ。われら少年が近づけなかったですが、国分町のなんとかビルにはオフィサーズクラブ(ここにはフルバン練習をよく聞きにいった)、花京院通りにはサージャントクラブ(ルイアームストロングを聞くため、一度だけでもぐりこんだことあり)など、それから川内にもクラブがありましたね。そんなふう

に、米軍(第9軍関係)のための「芸能タレント仕出し屋」が仙台にあったのです。その名を「マナセプロ」といいます。察しのいい方なら、納得が先行するでしょう。

このマナセプロの主はオバチャンで

した。先方は大人、こちらは子供ですから、親しく話したことはありませんが、名前からして沖縄からやっ



奈良駅でのルイ生
どり写真=宮城さん
の友人の撮影

てこられたのではと思っています。このマナセオバチャンの娘がリサで、後、ベーシストの渡辺晋と結婚し、マナセプロがナベプロになるのです。この物語は私の推察ですが、ほぼ間違

いのないことでしょう。

仙台で一流ジャズマン、ジャズバンドが出演 トリはシックス・ジョーズ、シックス・レモンズ

福島に在学中、ジャズコンサートがあると、マナセオバチャンから電報が来たものです。招待券ではありませんでした。ついでにいうと、マナセリサには会ってはいません。

こんなですから、仙台のジャズコンサートには、一流のジャズマン、ジャズバンドが出演していましたね。ですから私は、福島、仙台にしながら、それらを聞くことができました。シックス・ジョーズ、シックス・レモンズなどがトリでした。



当時のルイの面影が偲ばれる写真(外山さん提供) (上)江利チエミさんと(中)与田輝雄とシックス・レモンズの面々と。与田輝雄(ts)、渡辺辰郎(as)、松本文男(tp)、牛尾信夫(p)、平野快次(b)、フランキー堺(ds) (下)浅草国際劇場公演=1953年

フル編成のビッグバンドがいくつも、トリオぐらいのもいくつか、歌手はナンシー梅木がいましたが、ジャズコンサート開催時には、渡米してました。

それから、まだ無名な江利チエミが、アコ、ギター、ベースの米兵トリオと組んで、シュープライパイなんかを歌ってました。後に彼女に会う機会があり、そのことをいうと目を丸くしていました。

国分町のオフィサーズクラブのビッグバンドは、米兵のジミーという軍曹にしごかれ、スタンケントンナンバーをやっていました。

それらも、私が大学を卒業するころは、閉鎖されて、バンドは東京に移りました。私の大卒は昭和31(1956)年です。

年次ごとの記録を残しておけば、戦後風物がわかるのですが、こっちはファン、若さのはけ口みたいなものでしたから、正確さは欠けます。

友の誘いでサージャントクラブに潜り込み ルイのトランペットに触りサインまでもらう

花京院通りのサージャントクラブにルイアームストロングが出たのは昭和28年の暮れだと思います。高校同級の退学したSが、「ルイが来るぞ、聞きたきゃ来い。入れてやる」。彼はそこのボーイをしていたのです。あっちの音楽は食後になるんですね。私は出入り口脇に立っていました。やがてルイのコンボの登場。メンバーは「ジャズ・アット・ザ・クレスセント」のLPに似てベルマ・ミッドルトンの歌、トラミー・ヤングのトロンボーン、バーニー・ビガードのクラリネット、そしてマーティー・ナポレオンのピアノ、ベースはミルト・ヒントン、ドラムはうんと若い人でした(外山注:ケニー・ジョン=アームストロング・バンドに1953年10月加入、1954年5月退団)。立ったまま聞いていました

宮城健さんの話「日本酒の会は続いています、お目の方は残念な状態です。音声変換の盲人用PCで毎月メルマガの発信やメールも使いこなされています。メルマガには次のコメントを毎回添えられています。『このメルマガは、吟醸酒ファンと盲人仲間を送るモノです。この亭主は、盲人ですので編集にミスが多いと思いますが、お目こ



外山夫妻と宮城健さん(中央)=2011年9月11日、定禅寺ストリートジャズフェスティバルで

ら、演奏の中休みに脇にいたアメリカの民間人が「お前は何か?」と聞くのです。何か適当に答えたら、「ちょっと来い」という。ヤバイことになったかと思つていくとそこは楽屋。トラミー・ヤングに引き合わされ、大型のポートレートにサインをしてもらう。それから、ルイの前に引っ張っていかれた。私は、「セルマーに触らせてくれ」とブロークンでいう。セルマーとはトランペットのメーカー名なのだ。蓋の開いたケースに収まったトランペットのピストンを押した。それがよかったのか、ルイがバッグから全員の写真のプログラムを出して私の名を入れてサインしてくれた。

ここで私は「アイム シットイング オン トップオブザワールド」といった。「有頂天」という意味らしい。その

ころ、そんな歌が流行っていた。バンドの全員が爆笑した。シャレが当たったのである。それから、プログラムのそれぞれの写真のところにサインしてもらう。

このおいしい話は、実家が引越しのとき、いくつかの大事なものと一緒に捨てられてしまった。青春の夢であったか。

仙台のジャズコンサートが消滅すると同じように、日劇のそれも消えていったのではなからうか。そして日劇のウェスタンカーニバルがヒートアップする。昭和33年のことだそう。私はウェスタンには興味はなかったが、東京のペンフレンド女性は、黒田美治のチャックワゴンボーイズの熱烈ファンだった。ウェスタンも爆発する素地を持っていたのだ。

篠田さんは東京・文京区在住。昔ヤングアットハートというバンドでTBをご担当、大変なジャズファンでもある。WJF会員、宮城健さんの高校(仙台商業高校)の先輩。湯島吟亭亭主、技術士・一級建築士・中小企業診断士、幻の日本酒を飲む会・篠田安藤建築設計事務所・ジェイナスコンサルタンツなど、大変な肩書きを持っておられる方です。E-mail shinoda@ginjyo.jp



ぼしくお願いします。それとサッチモ来日の件は、本公演の前年にあった仙台のジャズコンだったと篠田さんは言っていました。添付写真(上中央の2枚)は、私も参加しました「篠田次郎氏傘寿を祝う会」(第49回幻の日本酒を飲む会)2013年4月の会場にて、①奥様とお祝ケーキの前で②飛び入りながら見事な演奏です。

ご寄付と嬉しいお手紙

ありがとうございます

- ◆鹿江正二様 (文京区) トランペット
- ◆秋山 京様 (兵庫県) トロンボーン
- ◆上野満夫様 (世田谷区 会員)
アルトサクソ、フルート
- ◆佐野政明様 (川越市) フルード
- ◆辰口悦三様(松戸市) トランペット 2点

ジャズ博物館へのご寄付は100万円を突破!

皆さまにお呼びかけをさせていただいている、ジャズ博物館復興・再開支援のご寄付は、多くの皆さまからお送りいただいております。今年7月末現在、100万円を超えております。

今年7月末から8月にかけての「サッチモの旅」でニューオリンズの元ジャズ博物館長のドン・マルキさんを通じ、直接博物館担当者にお渡ししてまいります。引き続きご支援のほどよろしくお願ひ致します。(外山) =9面に関連記事

アポロ劇場からコンサートへのお招き!

豪華になった今年の「サッチモの旅」

—現在も参加者募集中です—

ニューオリンズのジャズ博物館に皆さまからのご寄付を直接、お渡しすることができるという喜びに加えて、今年の「サッチモの旅」に、もう一つビッグ・イベントが飛び込んできた。

それはあのニューヨーク・ハーレムにあるアポロ劇場(写真下)へのイベント予約!

長年ハーレムで文化活動を続けていらっしゃる国際的なプロデューサー、カツ・アベ(阿部勝弥)さん(写真右)が進



めているハーレム文化推進プログラムのシリーズに入っている8月6日、たまたま我々ツアー一行がNYCに滞在中と知って、阿部さんがアポロ劇場のアマチュアナイトに予約、招待して下さった。櫻sakura という日本人のヴォーカリストも出演します。



阿部さんは先の「国際ジャズデイ 大阪」にもいらして、外山夫妻からWJFの活動など詳細な話を聞き、大変感動されていた。実はこの阿部さんこそ、当初から陰でずいぶんと尽力されて、外山夫妻を国際ジャズデイの表舞台に乗せて

「国際ジャズデイ」は、外山夫妻とのお付き合いの軌跡を思い起こすこととなりました。早大ニューオリンズジャズクラブの先輩の2人に憧れ、ニューオリンズの夫妻を訪ねたのは1971年の6月。お2人の帰国後、住まいが同じ浦安市だったこともあり、なにかにつけてお会いして夢を語りありました。ニューオリンズの子供たちに楽器を送りたい。日本に呼びたい。サッチモについて、演奏したい。上映したい。話したい。書きたい。▼WJFの設立で、夫妻の夢は一つ一つ実現していきました。例会の集大成は芸術祭への参加コンサート。子供たちへの楽器プレゼントは05年のニューオリンズを襲ったハリケーン被害の支援活動や、11年の東日本大震災でのニューオリンズから気仙沼の子供たちに支援の楽器へと続きます。12年にはニューオリンズの高校生バンドが来日、翌年は気仙沼の子供バンドがニューオリンズを訪問!▼夫妻の活動は高い社会的評価を受けてきました。そして今回ジャズデイ大阪会場での主題が「ジャズのかけ橋」だったのです。感無量の「国際ジャズデイ」でした。(山)



下さった方。と同時に、大阪にジャズデイを招聘した立役者でもあるのです。

「素晴らしいご招待を受けて、恵子と2人でいまから胸を躍らせています。そうだ、それなら今度はみんなで地下鉄『A列車』(写真左)に乗って、ア

ポロ劇場のある“W125st”までいきましょうよ」と外山さん。

♪You must take the “A” Train, To go to Sugar Hill way up in Harlem...外山さんの鼻歌が聞こえてきそうだ。

<ホームページがリニューアルされました>

外山夫妻と事務局の細川ハテミさんのご努力下、このほどWJFのホームページがリニューアルされました(写真右)。夫妻やWJFの活動などにアクセスしやすくなっています。ぜひ、覗いてみて下さい。下記にURL。



募集中

♪ジャズを愛する皆様

どうか会員になって下さい!!

また皆様のお知り合いの方々に

ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

=WJF年会費=

一般会員(General Membership)	¥6,000
学生会員(Student Membership)	¥3,000
賛助会員(Friends of Louis Armstrong)	¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通 : 5175119 “ワンダフルワールド”

お問い合わせは: WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email: saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン: Yahoo, Google で

<検索>ルイ・アームストロング

<http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>

編集長から